文書館を設置すべきことを具申した。植民地時代すでに本国の伝統を輸入して大学文書館を設置した開発途上国に比しても日本は、と慨嘆した氏にも曙光は兆しつつあると報告したい。次に二十年程前の本学図書館報『館燈』記事を挙げておく。

「University archivesは大学の歴史に関する史資料一切を収集保管・・・収集物は多岐にわたり大学史に関する公刊本、行政関係の印刷物、各種委員会記録、手書原稿、学長はじめ行政管理にたずさわる学内外要人の書簡、日記、メモ類、伝記、大学の物的財産中記念すべきもの—創立当初の家具とか草創期の人物にゆかりのある品・・・等々—archivesといっても博物館をかねた存在といってよい」（川原和子「貴重書図書館めぐり—アメリカとイギリス—（1）」『館燈』四二号、一九七七年　三五四頁）

『名古屋大学五十年史』のネタ本

専任編集室員　高木雅史

私が名古屋大学史編集室に勤務するようになったのは一九九二年四月からであった。稿本（通史第一次原稿）の編集が本格化した頃である。稿本の編集から通史刊行までの作業を進めていく上で、随分とお世話になったネタ本がある。各部局の沿革史・誌類がそうであることは言うまでもない。ここで特に記しておきたいのは、渋沢元治『五十年間の回顧』（一九五三年刊）と須川義弘『半生を顧みる』（一九八二年刊）である。

『五十年間の回顧』には、一九三九年に初代総長になられ一九四六年に退任されるまでの名古屋帝国大学時代の

苦労が綴られている。『半生を顧みる』には名古屋医科大学事務官として名古屋帝国大学創設に携わられた経過と、戦後復興期以降に名古屋（帝国）大学会計課長および事務局長として八面六臂の活躍をされた足跡が記されている。須川氏は名古屋帝国大学の創設後すぐに岡山医科大学に転出となり、一九四一年に名古屋（帝国）大学に戻られるという経歴の持ち主である。そのため『半生を顧みる』には戦前の名古屋帝国大学時代の記述はない。偶然のいたずらか、お二人の在任期間は重なっていないのである。

この二つの著作を併せ読むことによって、私は名古屋帝国大学の創設から戦後復興を経て新制大学への移行期までの歩みを知ることができた。この期間における名古屋大学の沿革に関する部分の通史記述は、この二著をもとに可能な限りの史料やデータを加えて肉付けしたものに過ぎないと言ったら言い過ぎだろうか。

一例をあげよう。『五十年間の回顧』には一九三八年頃、「重工業殊に航空工業が盛になつて税金が激増して愛知県の財政が豊かになつた」（九頁）ことから愛知県が創設費の国庫寄付を決定し、紆余曲折を経て名古屋帝国大学の創設が実現したことが述べられている。この記述は、名古屋帝国大学の創設要因を知る上での貴重なヒントである。一方、『半生を顧みる』には、「敗戦後の日本経済の大混乱と平価切下げのため、この資金はほとんど無価値となり、……地元及び創設関係者が東山に描いた東海随一の文化の殿堂は哀れ一場の夢と消え去ったのだと、私は涙のこぼれる思いであった」（八〇頁）と記されている。須川氏が示唆的に書きとどめているのは、十分に活用されることなく終わった創設費寄付金の末路である。

寄付金が創設の実現に果たした役割は、すでに著名な科学史家・広重徹氏が『科学の社会史』（一九七三年）の中で『五十年間の回顧』を典拠として触れている。通史ではこのことを具体的な史料を用いて実証的に明らかにする必要があった。先の二著中のヒントとなる記述をたよりに一次史料を探した。一次史料が発見できない「事実」

については、直接二著からの引用に拠らざるを得なかった。戦前の史料は空襲により、戦後のそれは復興・整備の過程で多くが失われているから、通史全体を通してそういう部分は少なくない。

二著では人物を中心にストーリーが展開するから、当時の雰囲気や登場人物のキャラクターまで垣間見ることができて面白く読むことができる。通史のように生硬な史料類がたくさん挿入されると、どうしても読みやすさが妨げられてしまい、面白みに欠けるところがある。実証性・客観性が強く求められる通史の性格上、それは仕方のないことかも知れない。

しかし、通史が明らかにした名古屋大学の姿は一面に過ぎず、他に多様な描き方があって良いと考える。名古屋大学との関わりを綴ったいわゆる裏面史が案外、次なる沿革史編纂にとって最も役に立つ「史料」となるのではないか。先の二著に改めて感謝を意を表したい。

（名古屋大学史編集室助手）

専任編集室員としての「自負」

専任編集室員　山口拓史

私が名古屋大学史編集室に専任助手として着任したのは一九九四年四月である。折しも『通史』刊行に向けて編集室が総力を挙げて取り組むべき時期であった。それまでこうした年史編纂作業に関わったことがない私としては、右も左もわからない状況で「限られた時間」内に『通史』を刊行させることの大変さを当初、感覚的にしか理解で